



# HI-FI ELLINGTON UPTOWN

DUKE ELLINGTON and his ORCHESTRA

ハイ・ファイ・エリントン・アップタウン/デューク・エリントン楽団

1. **SKIN DEEP** ..... (6:54)  
スキン・ディーブ
2. **THE MOOCHE** ..... (6:42)  
ザ・ムーチ
3. **TAKE THE "A" TRAIN** ..... (8:06)  
A列車で行こう
4. **PERDIDO** ..... (8:31)  
パーティド
5. **CONTROVERSIAL SUITE** ..... (10:33)  
コントラバーシャル組曲
  - a. **Before My Time**  
ビフォア・マイ・タイム
  - b. **Later**  
レイター

Jazz  
Immortals  
On CD

## PERSONNEL

Saxophones: PAUL GANSALVES, HARRY CARNEY, JIMMY HAMILTON,  
RUSSELL PROCOPE, HILTON JEFFERSON

Trumpets: WILLIAM ANDERSON, CLARK TERRY, WILLIE COOK,  
RAY NANCE

Trombones: JUAN TIZOL, QUENTIN JACKSON, BRITT WOODMAN

Drums: LOUIS BELLSON

Bass: WENDELL MARSHALL

Piano: BILLY STRAYHORN AND DUKE ELLINGTON

## DATES RECORDED

3: 6/30/1952

2, 4, 5: 7/1/1952

1: 12/8/1952

これはかつて“エリントン・アップタウン”のタイトルで発売された演奏をハイ・ファイ化して1曲だけ新しい曲を組みかえた新編集の名盤である。録音は1952年の7月を中心に行われたものだが、20年もの歳月を経た今日聴いても少しも古い感じがしないばかりでなく、その時に新たに整調されたハイ・ファイ技術と相俟って誠に聴きごたえのある演奏として我々の前に現れたものってよからう。

それは後年聴くエリントン・バンドの礎石はまさにこのアルバムが作られる前後に置かれたといえるからである。エリントンの楽歴は長い。恐らく最も長い期間に亘ってジャズのリーダー・シップをとって来たミュージシャンとして彼の右に出る者はいないであろう。1927年ハーレムのコットン・クラブに現れて名声を博してから既に50年

近い年月が経過した。そしてその特有なオリジナリティを保ちつつも彼のバンドのスタイルも年と共に変貌して来た。そしてもし“モダン・エリントン”という表現が許されるのであれば、まさにこのレコーディングが行われた頃、即ち51～53年の間にエリントンのバンドはその数年前から行われたバップの色彩を十分に消化してモダン・ジャズのな衣をまとうて登場したのであり、そこに私は“モダン・エリントン”が始ったといたいのである。そしてその後更に新味が加えられたにせよ後年のエリントン・オーケストラの発展はまさにこの51～53年のパターンの上に立っていると解すべきである。その意味でこのアルバムの歴史的意義は大きい。その1つは前述の様にビリー・ストレイホーンが——彼が1939年エリントンの編曲者として加わったことによってエ

リントン・オーケストラは既に1つの厚みを加えたのであるが——バップという形で拡がったモダン・ジャズ・イデオロギをエリントン・ムードの中に充分消化した形で、しかも惜しみなく用いることを始めたということである。今1つはソニー・グリアーの退団とルイ・ベルスンの加入というドラマの交代によってエリントン楽団のリズム的本質が全く異質のものに変わったということである。レナード・フェザーも私と同様の考えで指摘しているがルイ・ベルスンの加入によってエリントン楽団はそれ迄に同楽団がかって表現しなかった様なドライブのあるリズムに変貌した。リズムの性格がモダンになり、それ迄のエリントンにない新鮮なジャンプをする様になった。私が如何なる言葉を連ねるよりあなたがこのLPに針をおいた時に響いてくるシンバルのり

ズムが最も雄弁に物語るに違いない。

リズムやフレー징の面での変革は以上の通りであるがハーモニカルにはここでエリントンは大きな変革をとげていない。それは人々が今更の様にストラビンスキーやミヨーを讃え、ラベルやシェーンベルクに傾倒する前からエリントンはそうした先哲の業績に敬意も払っていたし、バップの創始者たちが“これぞ新しいハーモニーの展開だ”と大さわぎする様なことをエリントンは既に数年も前からやっていたから、この期に及んで新たに取り入れる必要のあるものは何もなかったのである。このあたりに先覚者としてのエリントンの偉大さがうかがわれる所以がある。

1940年代からエリントンは盛んに演奏会用の大作を書き、又コンサートで演奏するというに大いに意を用いて来た。従っ

て40年以降の彼の作品には、それ迄のダンス音楽から発展したバンド・ジャズと異って演奏時間の長いものやテンポの変るものや、そうした鑑賞用の作編曲がそのレパートリーのなかの大きな位置を占めることとなった。今日考えれば当然のこととして受けとられるジャズは鑑賞の為の音楽ということが、そうした姿で人々に受けとめられる迄には長い年月を要したし、エリントンはその様な方向に向って大いに貢献した人であるということがいえよう。そしてこのLPに収録されているピースもまたその例外でない。それは最初からその様な目的に始って書かれたオリジナルであったり、又昔は3分内外の短い作品としてまとめられたものが、十分な時間を与えられ、豊かな姿に装いをかえて登場したものであったりしている。

レコーディング・パーソンネルは次の様なものである。

ラッセル・プロコップ、ヒルトン・ジェファースン(as)、ポール・ゴンザルベス(ts)、ジミー・ハミルトン(ts & cl)、ハリー・カーネイ(bs)

ウィリアム・アンダースン、クラーク・テリー、ウィリー・クック、レイ・ナンス(tp) ファン・ティソル、クエンティン・ジャクソン、ブリット・ウッドマン(tb)

ルイ・ベルスン(ds)

ウエンデル・マーシャル(b)

デューク・エリントン、ビリー・ストレイホーン(p)というものであり、『A列車で行こう』ではベティ・ロッシュの歌が入っている。

〔演奏について〕

#### 1. スキン・ディープ(Skin Deep)

ルイ・ベルスン作のメディアム・バウンスのリップ曲であり、同時に彼のショウ・ケースでもある。冒頭からクリアー・カットなよく整えられた合奏が小気味よくオーケストラ演奏の粋を目いっぱい現わしてジャンプする。特に難解な楽想や、困難なテクニックが要請されていないが、バンド全体として完璧に近いバランスでベルスンのリズムによって全く新鮮なジャンプを聴かせてくれる。そして2ベース・ドラムを駆使する彼の長いエキサイティングなドラム・ソロがフィーチャアされてバンド・ジャズの醍醐味を盛りあげている。ベルスンは18才でジーン・クルーバのアマチュア・ドラマー・コンテストに優勝したという経歴の持ち主でスタイルとしてはクルーバやパディ-

リッチの影響を強く受けているといつてよからう。

#### 2. ザ・ムーチ(The Mooche)

1929年、エリントンが書いた古い彼のレパートリーの1つであり、最初は僅か3分のSPに録音された。この演奏では原曲の曲想は十分に保たれつつもそれがより洗練され、磨き上げられた形でより豊かに表現されている。エリントンはこの曲で見る様に彼の古いオリジナルを幾度も再演しているケースが多い。その度に彼の音楽的発展が加味されて、それはより新鮮な、しかも円熟の度を増したものに積み上げられているが、驚くべきことは如何なる場合でも原曲の持つ本質を決して失っていないという点である。この演奏でも最初にスタートされるテーマはオリジナルと同様の三管編成

であるが、そのバックに美しいモダンなサックス・ソロが重ねてあるといった様に渋い裏打ちがしてある。また“ジャングル・スタイル”と呼ばれた様に初期のエリントンのバンド・サウンドを特徴づけるものの1つにトロンボーンやトランペットにブランジャー・ミュートをを用いて人声や動物の声に近い様な効果を狙った技法がある。再びそれはここでもクエンティン・ジャクスンやレイ・ナンスによって昔ながらに踏襲されているがその質、量、バックアップ等すべて豊かになり、オーケストラの綾が見事に絡んでおり、ハリー・カーネイのバリトン・ソロも内容豊富になっている。

ここに私達は古いエリントンと新しいエリントンの見事な結合を見るのである。

### 3. A列車で行こう(Take The “A” Train)

1941年にストレイホーンが書いたインギー・ナリフ・チューンであり、以来エリントン楽団のシグネチャー・チューンとして今日も愛用されている名曲である。淡々として導入の役を果たすエリントンのピアノ・ソロは類稀なく“乗って”いるし、終りのヴァンプに続いて導きわたるサックス・ソロによるユニゾンのテーマの響きは41年のオリジナル・レコーディングに比して数倍華麗でもある。ヴォーカルのベティ・ロッシュは1948年エリントンがカーネギー・ホールで“ブラック・ブラウン・アンド・ベージュ”を初演した時にフィーチャされた人で元来はブルース・シンガーである。ここでは彼女は1コーラスを歌ったあとポップ・スキャットを用いて、この曲の再演にユニークな色どりを添えている。ポール・ゴンザ

ルベスのソロ・ワークも堂々としていて原曲は70ミリ・テクニカラー・総天然色で再上映されたといった扱いを受けている。

### 4. パーディド(Perdido)

ファン・ティソルの作になるジャズのスタンダード曲で誰知らぬものはなかるう。ここでも42年の初演盤に比して、オーケストレーションは華麗になり、フィーチャされるソロも豊かに成長している。殊に最後の盛り上りを示すアンサンブルは近代的バンド・ジャズの粋を示すものでドライヴィングな合奏の上をウィリアム・(キャット)・アンダースンのハイ・ノート・トランペットがエキサイティングな効果を加えている。

### 5. コントラバースァル組曲 (Controversial Suite)

この曲は2部から成っており、第1部はピフォア・マイ・タイム(Before My Time)、第2部はレイター(Later)と題されているエリントンの自作である。題名の示す様に第1部にはエリントンが自らの音楽を形づくる迄に彼の血となり肉となった要素が見事アマルガメイトされている。ブルース、ニュー・オーリンズ・ジャズ、テイルゲート・トロンボーン、2ビート・リズム、ラグ・タイム等エリントン以前のコーニーなジャズがモダンな音質の合奏をさりげない裏地にして或いは早く、或いは遅く連ねられ、連想は“ライン・ルーフ・ブルース”から“タイガー・ラグ”をも含んでそれ迄のジャズの全てが華麗に総括されている。“コントラバースァル”と題名が示す様に、第2部に於て

は楽想は未来に向って扉を開いている。宇宙への旅立ちやエレクトロニクスの世界を思わせるトーンやフレーズ、秒読みを思わせる様なウッド・ブロックが行う時の刻み、合奏部にかがわれる現代の不安やグルミーなテーマ、そしてエリントンのラプソディックなピアノは既にこの時にして、前後への道程を象徴しているかに見える。コンピューターの様な正確さと重厚な音のマスで盛り上った合奏で曲が終るかと思いきや、曲想は一変してメカニカルな最初のテーマにもどり未来に向うあらゆる未知と無限の発展を示唆するかの様に、曲は聴くもののイメージにすべてをまかせせるかの如く唐突に終わっている。限りない余韻を残して……。

〔牧 芳雄〕

\*この解説はアルバム発売時（'79年）に使用したものを流用しています。御了承下さい。

COMPACT  
disc  
DIGITAL AUDIO

## コンパクト・ディスクの優れた特徴

### 《音が、すばらしく良い》

コンパクト・ディスクは、最新のコンピュータ技術を使った「デジタル」方式。従来のレコード（アナログ方式）では考えられなかったほど、良い音が得られます。

●ピアノシモからフォルティシモまでを、臨場感豊かに再現します。コンパクト・ディスクのダイナミック・レンジ（最弱音と最強音の差）は、90dB以上。この数字の迫力は、コンサート・ホールで聴くオーケストラの演奏が約100dBと言え、納得していただけるでしょう。

●人間の耳に聞こえる範囲以上の超低音から超高音までを自然な音質で再現します。

●音の歪み率は、従来のレコードの10分の1以下。また、回転ムラによる音の揺れや震えはほとんど無く、とてもピュアで澄んだ音を再現します。

●コンパクト・ディスクは、雑音を徹底的に排除。（SN比は90dB以上）針が音溝をトレースする雑音も無いので、休止部はかきりなく無音にちがづきました。

### 《いつまでも変わらない、いい音》

コンパクト・ディスクは、レーザー光線で音を取りだし非接触ピックアップ。針を使わないので、音溝がすり減るようなことはありません。また、信号が刻まれた面はプラスチックの膜で覆っており、直接触れることができません。だから、汚れにも強く、いい音がいつまでも変わりません。

### 《ポケットにも入る、コンパクト・サイズ》

コンパクト・ディスクは、シングル盤より小さく、カセット・テープより薄い。持ち運びが簡単に、収納スペースがぐんと少なくてすみます。

### 《扱いカンタン》

プレーヤーへのセットは、片手でボン。演奏のスタート、ストップ、選曲、頭出し、繰返し演奏などの操作は、ボタン一つですぐOK。デジタルならではの簡単操作ですから、どなたにも気楽に使っていただけます。

### 取扱上のご注意

- ①レーベルの反対側の光った面にレーザー光線をあてて信号を読みとりますから、この面を汚したり傷つけたりしないようご注意ください。
- ②汚れがついたときは、柔かい布で軽く拭きとってください。従来のレコード用スプレーやクリーナーは、使わないでください。
- ③ディスクを拭く場合は、円の中心または外側に向かって布を動かします。円周の方向には拭かない方が安全です。
- ④レーベル面に鉛筆、ボールペンなどで文字や記号を書きこまないでください。
- ⑤このコンパクト・ディスクのケースは、70℃以上になると変形するおそれがあります。直射日光の当る所、暖房器具の近くなど、高温の所には保管しないで下さい。特に、車のリヤトレイなどへの放置はご注意ください。また、湿気の多い所も避けて下さい。

## HI-FI ELLINGTON UPTOWN

Skin Deep  
(featuring Louis Bellson, drums)  
The Mooche

Take the "A" Train  
Perdido  
Controversial Suite

DUKE ELLINGTON and his Orchestra

Once again Duke Ellington and his Orchestra present a program of full-length concert arrangements of some of their most popular numbers. Three of the numbers are substantial favorites among Ellington devotees, while two of them are relatively recent. Old or new, the same careful craftsmanship is evident in the expressive blend of sound, rhythm and melody that characterizes the Duke's work. Without ever making pretentious claims to officiating at the reflexive marriage of popular and classical music, the Ellington orchestra nevertheless serves as an almost solitary ground where imaginative popular thought is controlled by classical traditions. In the development of an Ellington arrangement, no matter how exciting it becomes as it builds, it is a classical precedent.

It has become fashionable, almost imperative, in recent years, for composers and arrangers of serious popular music to make sweeping loans to the work of Stravinsky, Milhaud, Ravel and various others of their respective schools, and this is a good thing, since almost all innovations in popular music were worked out classically by those composers. A good deal of nonsense has been written about progressive movements in popular music that can be stopped cold by even a cursory glance at a Stravinsky score. The point is that such influences are by no means new or original. Duke Ellington was using them and acknowledging them years before most of today's eager young innovators were able to beat out a tempo. Some time ago he listed as his favorite composers George Gershwin, Stravinsky, Debussy and Respighi, a group from which anyone can draw revealing conclusions.

In this particular collection, Ellington and his orchestra give brilliant full-length performances of a representative program, affording record collectors a chance to re-acquaint themselves with some of the impressive moments of Ellington concerts. Louis Bellson's *Skin Deep* is plainly and simply a rouser, displaying the kind of sharp, stimulating popular music the band can produce, and offering a fine showcase for Bellson's own remarkable drumming in an extended solo of rare excitement. *The Mooche*, which follows, is a shining example of the Duke's writing in 1929, refined and polished through the intervening years but never losing its essential period flavor; this is one of the unique facets of the Ellington band, that throughout changing styles and tastes, all encompassed in their arrangements, the basic originality of a composition is never obscured. An occasional echoing chord may be a concession to mid-century tastes, but they in no way obscure the groovy atmosphere of a striking Ellington creation. His new setting of *Take the "A" Train* is not the well-remembered original, but one that blends elements of that classic with new ideas in an ever-interesting re-creation. The vocals by Betty Roché, serves as a reminder that the pop influence has been more than passing, too.

In *A Tone Parallel to Harlem*, one of Ellington's more ambitious forms is demonstrated. The extended suite, most often depicting Harlem and its musical influences, is one of his favorite forms, and here again finds an agreeable and provocative expression. Long-time fans will remember *Black, Brown and Beige* and the *Liberian Suite*, among others in this rewarding group, and make their own comparisons. Among the most recent of Elling-

ton scores, *A Tone Parallel to Harlem* represents a summing-up to date of his musical experience, and lays it before the listener in a constantly invigorating pattern of sound. The program comes to a close with an extended arrangement of *Perdido*, a classic in the orchestra's book, now moving into its second decade as a must for any self-respecting group. Light and airy in its present treatment, it spotlights some of the orchestra's star soloists in successive solos. Like practically everything else the orchestra plays, it has been subjected to constant re-arrangement and examination, and it is a safe guess that this will not be the final treatment fine as it is.

For the continual revision of a score is also an Ellington trade-mark, along with precise musicianship and the minutely studied flow he induces from his orchestra. Almost every performance finds additions and subtractions, a constant experimentation to find the most expressive way of treating a number. This is not done in a classroom sort of way, but through group work, when an arrangement begins to sound worn to the orchestra, it is a fair chance that it will sound worn to its listeners, too, and the reworking begins, it or rework. The harmonies change, the rhythms change, even the tempo changes, and a new variation on the theme is the result.

The most important date in the Ellington chronology is December 4, 1927, when he and his then-new orchestra opened at the old Cotton Club in Harlem. At the time, Paul Whiteman was the King of Jazz (sic), and to the extent that Whiteman represented popular music, originally gasped for breath in what essentially was a pseudo-symphonic treatment of the business man's bounce. A lot of brilliant musicians evolved from this atmosphere, some slow, and if any single force can take the credit for the evolution, it would be Duke Ellington's orchestra. An audience which couldn't quite accept the roughness of a Beatie Smith or an Armstrong at the time was now, therefore ready to toss out the front-porch ballads and the dormitory novelties, and the blast of fresh air which Ellington and his men let in was a revolution. So caustic a critic as the late Constant Lambert was willing to credit Ellington an important place in the music of the Twenties, and subsequent writers have been no less generous. Since 1927 the Ellington orchestra has changed radically, and so has popular music, both influencing the other. The evidence of that change, and an exciting summation of it, is contained in this program. It remains only for the listener to absorb and enjoy it, surely one of the most agreeable pastimes available anywhere.

Personnel:—

Saxophones: Paul Ganswele, Harry Carney, Jimmy Hamilton, Russell Procope, Hilton Jefferson  
Trumpets: William Anderson, Clark Terry, Willie Cook, Ray Nance  
Trombones: Juan Tizol, Quentin Jackson, Britt Woodman  
Drums: Louis Bellson  
Bass: Wendell Marshall  
Piano: Billy Strayhorn and Duke Ellington

MASTERPIECES BY ELLINGTON. Mood Indigo • Sophisticated Lady • The Tattooed Bride • Solitude. 12-inch "Lp" ML 4418

Other: CBS Records by Duke Ellington and his Orchestra: MOOD ELLINGTON. On A Turquoise Cloud • New York City Blues • Golden Cross • Three Cent Stamp • My O Six • Lady of the Lavender Mist • The Clothed Woman • Progressive Cavalcade. 10-inch "Lp" CL 6024 • 45 Set B-164

LIBERIAN SUITE. I Like The Sunrise • Dances Nos. 1, 2, 3, 4, 5. 10-inch "Lp" CL 6073



32DP 597 MONO

Manufactured by CBS/Sony Inc. (Tokyo Japan) © CBS Inc./S O N Y © Sony Corp. (s)

WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.

デューク・エリントン  
ハイファイ・エリントン・アップタウン

CBS/SONY  
32DP 597

# HI-FI ELLINGTON UP TOWN DUKE ELLINGTON

ハイ・ファイ・エリントン・アップタウン / デューク・エリントン

- 1 スキン・ディープ  
Skin Deep
- 2 ザ・ムーチ  
The Mooche
- 3 A列車で行こう  
Take The "A" Train
- 4 パーティド  
Perdido
- 5 コントラバーシャル組曲  
Controversial Suite  
ビフォア・マイ・タイム  
Before My Time  
レイター  
Later



T4988 009 53775 7

H·12·21

Jazz  
Immortals  
On CD

COMPACT  
disc  
DIGITAL AUDIO

Manufactured by  
CBS/Sony Inc.  
(Tokyo Japan)  
© CBS Inc.  
SONY + Sony Corp  
WARNING:  
All Rights Reserved  
Unauthorized Rep  
roduction is a violation  
of applicable laws.

32DP 597  
MONO

#### 取扱上のご注意

このコンパクトディスクの  
ケースは、10年以上になると  
変形するおそれがあります。  
直射日光の当たる所、  
暖房器具の近くなど  
高温の所には  
保管しないで下さい。  
特に車のリヤトランクなどへの  
放置はご注意ください。  
また、湿気の多い所も避けて  
下さい。  
ディスク面に付着した汚れ、  
ほこりは柔らかい布で  
拭きとってください。

●  
このディスクを権利者の  
許諾なく無断でテーブ  
ルの他に録音することは  
法律で禁じられています。



¥3,200

DUKE ELLINGTON HI-FI ELLINGTON UPTOWN

CBS/SONY  
32DP 597